

横須賀市平作川低地の 環境変遷と中世の開発について

Changes in the Environment of the Hirasakugawa River Lowlands in
Yokosuka City and Development in the Middle Ages

中三川 昇

はじめに

① 平作川低地周辺地域の中世以前の遺跡と自然環境

② 平作川低地の中世遺跡と自然環境

③ 蓼原東遺跡を取り巻く環境変化と地震災害

まとめ

〔論文要旨〕

中世都市鎌倉に隣接する三浦半島最大の沖積低地である平作川低地の中世遺跡を中心に、出土遺物や遺跡を取り巻く環境変化、自然災害の痕跡などから、地域開発の様相の一端とその背景について考察した。平作川低地には縄文海進期に形成された古平作湾内の砂堆や沖積低地の発達に対応し、現平作川河口近くに形成された砂堆上に、概ね5世紀代から遺跡が形成され始める。6世紀代までは古墳などの墓域としての利用が主で、7世紀～8世紀中頃には貝塚を伴う小規模集落が出現するが比較的短期間で消滅し、遺構・遺物は希薄となる。12世紀後半に再び砂堆上に八幡神社遺跡や蓼原東遺跡などが出現し、概ね15世紀代まで継続する。両遺跡とも港湾的要素を持った三浦半島中部の東京湾岸における拠点的地域の一部分で、相互補完的な関連を持った遺跡群であったと考えられるが、八幡神社遺跡の出土遺物は日常的な生活要素が希薄であるのに対し、蓼原東遺跡では多様な土器・陶磁器類とともに釣針や土鍤などの漁具が出土し、15世紀には貝塚が形成され、近隣地に水田や畑の存在が想定されるなど生産活動の痕跡が顕著で、同一砂堆における場の利用形態の相違が窺われる。蓼原東遺跡では獲得された魚介類の一部が遺跡外に搬出されたと推察され、鎌倉市内で出土する海産物遺存体供給地の様相の一端が窺われた。蓼原東遺跡周辺地域の林相は縄文海進期の照葉樹林主体の林相から、平安時代にはスギ・アカガシ亜属主体の林相が出現し、中世にはニヨウマツ類主体の林相に変化しており、海産物同様中世都市鎌倉を支える用材や薪炭材などとして周辺地域の樹木が伐採された可能性が推察された。蓼原東遺跡は15世紀に地震災害を受けた後、短期間のうちに廃絶し、八幡神社遺跡でも遺構・遺物は希薄となるが、その要因の一つに周辺地域の樹木伐採などに起因する環境変化の影響が想定された。